

登園してくる子どもたちの姿は一人ひとり違っていています。ちよっとはにかんだ表情で部屋に入ってくる A ちゃん、先に来ている子どもをじっと見ている B ちゃん、「あのね、これ見つけたの」と登園途中で見つけた花を見せてくれる C ちゃん・・・。

4月、5月はすんなりと別れることができたのに、この頃になってお母さんと離れがたい様子を見せる子どももいます。理由はその子どもによって違いますが、私たちはその子にも幼稚園の生活の楽しさが伝わっていることを感じています。でも子どもは甘えて試して「帰っちゃだめ」とお母さんを引き止めます。気持ちをよく知り見守ったり、遊びに導いたりしながら支えています。

かえでの生活の中で経験していること・経験してほしいと願っていること

〈その1 待つこと〉

幼稚園の中には子どもにとって待つことがたくさんあります。お家ではどうでしょう・・・？

D ちゃんは身支度を終わると三輪車置場に行きます。お目当ての三輪車が空いている時もありますが、空いてないこともあります。「先生、乗りたいのに三輪車ないよ」と困った顔で私に訴えて来ます。「そうね～。E ちゃんが乗っているからもう少し待っていきましょうか？」と私が言うと、「いやだ。待てない」と怒っています。「そう。待てない気持ちなのね。でも E ちゃんは乗ったばかりだからどうかしら」と私がつぶやくと D ちゃんは「先生、早く言ってよ」と私を引っ張ります。「では、いっしょに言ってみましょうか？」と一緒に E ちゃんのそばまで行き、交渉します。案の定、E ちゃんは「乗ったばかりだからだめ～」と代わってくれませんでした。「乗りたいのに～」としょんぼりしていた D ちゃんでしたが、空いている三輪車に乗り、E ちゃんの様子をじっと見えています。そして E ちゃんが三輪車から離れるや否や急いで乗りに行きました。

次の日の D ちゃんはやっぱり三輪車に乗りたくて、三輪車置場の前にいました。今日はどうするかしらと見ているとじっとお目当ての三輪車に乗っている他の子どもを見えています。D ちゃんはすぐには動き出さず、しばらく見ていた後に近づいていって「貸して」と言いました。「もうちよっとしたらね」と言われると「やっぱりそうか」と一人で言い、砂場に歩いて行きました。その日、D ちゃんは砂場で水を流したり、穴を掘って遊びました。

三輪車だけではなく、ブランコや保育室の中の木の車やレール汽車など使いたいけれど①待たなくてはいけないものはいくつもあります。また、これは②大きい組になるまで待ちましょうねというものもありますし、③子どもの力が備わるまで待つもの（木登りや屋根登り竹馬等・・・）もあります。D ちゃん場合は①の『待つ』です。使いたいのに使えない姿や、できずにじれてる姿はいじらしく、見ている大人としては「何とかしてあげたい」と思うものです。でもこの時に子どもがやりたい気持ちをためることや試行錯誤すること、ぐっところえることは大切な経験だと思います。言い方を変えたり、タイミングをねらったり、相手の様子を感じ、行動に移したり・・・人間関係の学びの時です。



〈その2 気持ちを受け止められ、また一步ふみ出す〉

うさぎ組の部屋はうさぎ組の子どもの部屋であると同時に様々な子どもがやってくる部屋でもあります。転んだ子どもが傷口をきれいにし、絆創膏を貼って、ちょっと一息ついて遊びに戻っていくこともありますし、友だちとの間で何かあった時に気持ちを落ち着かせに来る部屋でもあります。

F ちゃんは時々「お母さんに電話をしてください」とやってきます。「あのね、お母さんに会いたくなっちゃったの」私は「そう、お母さんに会いたくなっちゃったのね」と言いながら F ちゃんの顔をちらっと見ます。私はその時の子どもの様子によってじっと向かい会う時とあえて何か手を動かしながら子どもの様子を伺う時とに変えます。F ちゃんはうさぎのぬいぐるみを手に取りながら「そうなの。お母さんに1番に迎えに来て欲しいの」と言います。私は「では、お母さんに電話するわね」と言って受話器をとり、うそこの電話を始めます。F ちゃんはじっと私の顔を見えています。そして電話を聞き終わるとほっとした顔で部屋に戻っていきます。

本当に電話した（とあって）安心する子どももいますし、自分の気持ちが受け止められたことで安心する子どももいます。「電話して」と言いながら、しばらくおしゃべりをして戻っていくこともあります。

G ちゃんは「ここが痛い」と少し前に傷めた（と思われる）古傷や虫さされの跡を痛そうな顔で見せにきます。「どこどこ？」と私は神妙に覗き込み、「あーこれはちょっと痛かったわね。薬をつけましょうね」と言って保湿クリームをつけます。「もう大丈夫かしら？」と聞くと G ちゃんは「こっちも痛かった」

と違う場所を指差します。「あらこっちもね」と言って薬を塗りフーフーフとGちゃんの指に息を吹きかけます。Gちゃんは少し笑顔になります。



「また痛いところがあったら、いらっしやい。でも今はもうだ・い・じょ・う・ぶ」とゆっくり言うと「うん」と頷いて部屋に戻って行きました。子どもの気持ちを思い巡らし、その子どもがほっとして前に進むことができるように受け止めたいと思っています。

(永瀬真澄)